● 座談会 「審査を終えて」

出席者　審査員　佐野　ぬい（　画　家　）
審査員　田口　安男（　画　家　）
審査員　中山　忠彦（　画　家　）
審査員　安永　幸一（美術評論家）
審査員　淀井　彩子（　画　家　）
（五十音順、敬称略）

全体的な印象、特に印象に残った作品について

安　永：今回、進行役を務めさせていただきます安永です。どうぞよろしくお願いいたします。
最初に、まず全体的な印象、あるいは特に印象に残った作品のことについてお話しいただきたいと思います。

田　口：割合にモノトーンの作品が目立つというか、その方向がつよくなってきてる感じ。世の中もモノトーンだからということなんでしょうか。

佐野　ぬい

田口　安男

中山　忠彦

ない物ねだりをすれば、何かケレン味なく絵の具をぶつけた・塗った作品も、数あっていいのではと思いました。
それから、いい悪いの問題ではなく、表現の過程でただ描くんじゃなくて、こちらが分からないぐらいに、プリント的で間接的な技法を織り込んでいる表現がとても成熟してきたということがありますね。

中　山：まず審査をしながら感じたことは、画面の形として、今は正方形全盛の時代かなあというふうに思いました。その点、大賞をとったのは通常のFサイズですから、そういう全体の感じからいうと例外的なものかもしれません。

安　永：100号の長い寸法の方にみんな合わせてきてるんでしょうか。

中　山：そうですね。多分、制限のサイズの中で一番面積の広いのが正方形ということだと思います。これは今の一般的な団体展や公募展の一つの傾向のようですね。制限寸法以内に、とにかく大きくとるということなんですが。
それともう一つは、結果として非常に変化に富んだ具象から抽象までの作品が選ばれたということにおいて、妥当な審査が行われ

安永　幸一

淀井　彩子

たというふうに考えます。

ただ、田口先生がおっしゃったように、やっぱりモノトーンが非常に多いのは、世の中の今の状態なのか、あるいは皆さんが目指している方向なのかわかりませんけれども、ただモノトーンの中にも、例えば大賞作品にあるように、鉛筆の色の中に感じる非常に幅の広い墨の豊かさというものも感じられますから、色華やかなものだけに目をとらわれる必要はないと思います。

写実的な作風がこの中で二、三あります。その中のわだつみ賞の作品の裏を見て初めてそこで「ああ、小木曽さんだ」というふうに分かったんですが、小木曽さんは東京芸大で非常にしっかりした基礎的な勉強をしている方です。最近の作風から、この春、瀧悌三さんと武田厚さんが決められた文部科学大臣賞にも選ばれ、日動の昭和会賞も去年とって、今大活躍中の作家です。ただ、地方に居を据えてますから、そういう意味でのいろんな不便さはあるでしょうが、坂本繁二郎ではありませんが、地方にいることを逆手にとった強さを持って自分の勉強をしてるということで、私は非常に嘱望をしている一人です。

でも、色もこれだけあればかえってモノクロの作品としても目立つし、色を使った作品もお互いに助け合って、いいシンフォニーを奏でているんじゃないかと思います。

田　口：わだつみ賞の個別評になってるので、一言つけ加えると、力作で、成功作だと思いますが、ない物ねだりを言えば、部分部分がふわっとした感じで問題が残ります。これからどうなるだろうという気がします。アウトラインをはっきり締めくくる、括弧でくくるようにもってくることで絵画性が成り立ってるわけです。そういうぎりぎりのところで絵が成り立っています。

ただ、部分部分囲われた単位の中が、絵の問題として、ふわっと何か一通りというか甘いんではないか。

中　山：それは非常にいいアドバイスですね。彼の作品をずっと見続けてて、私も同じ感想を持ちました。アウトライン入れるとそれで終わったというような、そういう一つの達成感をアウトラインに求めてるかもしれないと思います。

佐　野：審査員を仰せつかったときに、私は何を基準にして作品にあたるかということで、「色と、形と、もう一つ」ということを考えました。

安　永：「色」と「形」と「もう一つ」。

佐　野：その人の絵によって違いますけれども、形からじゃなくて私の場合は色彩。色があって、そこに形を結びつけてきたものですから、見方はそれでいこうと思って、ここにある作品を審査させてもらいました。

それから「もう一つ」は、その絵から、独自の言葉を感じたい、それと若い世代に何か力になってあげたいという気持ちがありました。

全体的には、何か絵に対して自分は「これ何かな」というふうな不思議な、不可解さのあるものに目がとまったりしましたが、私が見たときに、すっと自分の気持ちが素直に見られて、そしてその素直な気持ちで見た後があくまでも清々しい感じがして、それで後何かが残るという絵が良かったです。

淀　井：私は、それぞれの作品から生き生きとしたものが伝わってくると嬉しいなあと思います。

全員知らない方ですから、絵を通してしか通じてこないもの、絵から何かを発信しているもの、年齢とは関係ないですけど、若々しさとか生命観とか、そういうのが伝わってくると望ましいと思って絵を見てきました。

安　永：私は今回初めて審査に参加させていただきました。アジア美術館に勤務しているものですから、中国を初め韓国、インド、あるいは東南アジアなど、各国の現代作家の作品を見る機会が多いのです。今、アジアの現代美術界は、非常に元気があって、特に若い作家を中心に問題意識を持った優秀な絵画作品がいっぱい誕生しています。そういうものを日ごろ見てて、例えば社会問題であるとか政治問題であるとか、あるいはジェンダーの問題であるとか、民族の問題だとか、自分の身辺を取りまくいろんな問題に直面しながら、何とかそれを打破しようという、そういう非常に精神的に強いものといいましょうか、そういうものが絵画の表現に表れてきているものをずっと見ていますので、そういう作品を期待しながら、今回初めてこの展覧会の審査に臨みました。

そうした期待に応える作品が、結局、最終的には賞に残ったり入選したりしたわけですが、落ちたものの中には、ちょっと首をかしげるような作品もありました。何のためにこういうものを描いているのだろうとか、こういうものを描く必然性がどこにあるんだろうとかいうようなことを考えさせられる作品もありました。アジアの現状と比較すれば、今の日本は、少しぬるま湯に浸かったような状況にあるんじゃないかと思いながら審査に当たりました。

最終的に残ったものは、みなそれぞれに狙いがはっきりしているし、主張したいものも非常に明瞭に出ていて、そういう点では、残るものはやっぱりいいものが残るんだなという思いになりました。

上位五賞の作品について

安　永：それでは、各賞について、それぞれ先生方のコメントをお願いいたします。では、まず非常に文学的なタイトルの大賞作品「影日記－澹々Ⅱ」からお願いいたします。

田　口：ドローイングが幾つかあった中でも力があって、集中力を発揮した作品でしょう。ドローイングだけれども、ある種の絵画性というか、厚みがあって、鉛筆が主なんでしょう。いいと思います。

この揺れ動く波というモチーフは、現場で見ながら描いたというものではないでしょう。写真や何かをダシして、それの絵画化ということかなと一応見るんですが、それにしても木版画なんかの持ってる単純な強さというものがありますね。単純なものの中にある奥行きというか厚みがある。

安　永：この方は2点出してあって、落としたもう1点の方もすごく力があって甲乙つけがたかったという印象があるんですけど、女性の作家だとは思いませんでしたね。

中　山：私もジェンダーの問題は全く考えずに、この作品を見ていましたが、先ほどから女性だということがわかって、もう一度また見直しました。女性らしいというと曖昧な表現なんですけれども、デリカシーを持った表現と、構築性のある画面構成というものをうまく組み合わされていると思います。

それから、もう一つの組み合わせのおもしろさは、写実的なものと、例えば羽毛の飛んでるああいう霊的な方法と、水面の揺れる影の様式化といいましょうか、そういうものとの対比が非常におもしろく感じられました。

ただ私は、彼女がどこまで執着を持って物の質に迫るかどうかわかりませんけれども、もっとこの様式化を極端な対比をもって、例えば横にあるコンクリートなんでしょうか、あの円柱のようなもの…。

安　永：パイプでしょうね。

中　山：パイプですかね。それから向こうにあるコンクリートのしっかりした柱、そういうものの質の対比というものに対して、もっと執念深く追求をしていってもらいたいというふうには思います。

ただ、トーンは非常に美しいですね。なかなかこういう美しいトーンは見られません。

田　口：確かに、あの上の方の部分は難しそうですね。甘い表現です。

佐　野：私も他の先生方と同じようには思うんですが、中山先生の言葉につなぎますと、あの羽毛ですか羽ですか、あれは私から見ると甘い、要らないと思います。それから質の対比ですが、やっぱりもっと書き込むべきだと思いますが、鉛筆の持っているその振幅の広さというのは、この方はいい資質を持っていらっしゃると思いました。

しっかり描けてるということは、それが絵の強さに繋がるので、それをこれから期待しております。

淀　井：私は、形が、特にこの画面を横ぎるパイプの形が不満だったんです。近くで見ると描き方が素朴なんですよね。何か、もっと徹底してできるんじゃないでしょうか。

安　永：多分、長年この仕事をやってこられて、一つの到達点というのがこの時期に何となく見えてきたという、そういう状況があるんじゃないでしょうか。

淀　井：感じは、いいんですよね。

佐　野：だから、淀井さんがおっしゃったように、もう1点も出していただいて見たときに、素朴はいい言い方ですけど、幼い描き方がありますが、そこをうまく使うということをおわかりになってですかね。

安　永：前回の展覧会の図録の座談会で、「若いときはモノクロに集中して非常に緊張感のある作品を作るけれども、年とってくるとだんだんそれが緩んで少しカラフルになる」というお話しを田口先生がされていましたよね。ちょうどその境目のぎりぎりのところでのモノクロによる緊張感が非常に感じられるんですよね。かなり精神的な、あるいは肉体的な問題とも絡んでくるだろうと思います。こういう仕事はすごく根気が要りますからね。

くり返すようですが、そういう点では今まで歩んでこられた一つの道程が花開いた時期じゃないかなという感じがします。

次は、石橋財団石橋美術館賞です。「デンキ虫」という、これは64歳の女性の方の作品です。

田　口：僕は、今回の中でも色合いは大変好きです。

ただ、その分、不満の方が出てしまうんですが、それは構成的な問題で、いろんな線状というかストロークが割合に単純に、外に放射状に逃げて行ってる感じの部分です。極端なことを言えば、逃げて行ってるだけ。そこで別に碁や将棋を持ってくるわけにはいかないんでしょうが、絵画に四隅の厄介さというのがあります。四隅に近づくにつれて、何か次元が違ってきますよね。そういう平面の中における構造についての意識が、ちょっと単純なんじゃないか。そういう意味では、あんまり矛盾のない無難な構図です。自分の得意なストロークが放射状になっていって、一応成功作ができてきているという、その辺のところを考えてゆくと、作家としてもっと革新的になっていくのかな。

中　山：私は、抽象・具象に限らず、絵の基本は構図だと思っています。今、

田口先生がおっしゃったように、この四角の画面を緊張感を持って活かすための方法としては、絵の中にあの直角の鍵型のものはなくても、この場合はよかったんじゃないかというふうに考えます。逆に四隅の緊張感が消えていったというふうに私は感じ取っているんですけれども。

ですから、この場合、あれを除いて想像してみますと、もっと画面の正方形の特性が見えてくるというふうに考えております。

安　永：佐野先生、いかがでしょうか。

佐　野：私は、直感的な色彩感覚が好ましく見えたという点で、作家は女性かなと思いました。

やはり、田口先生がおっしゃったみたいに、よくよく見ると割合に月並みな構図だと思います。ですから、動きを外へ逃がそうとか、こういう斜めの線で作品をまとめていこうと思っていますけれども、更に構図を一層頑張っていただきたいと思います。

淀　井：白いところはいかがでしょう。

佐　野：当たり前に見えます。そういうものをどんどん自分の目で削ぎ落としてみたときに、描くべき形と色のバランスを考えていただけば、飛躍に繋がっていきますね。

田　口：色の問題を付け加えれば、やっぱり自分の得意な色を使うところですね。それで歌を歌ってしまって、割合うまくいってる。もっと自分の絵の中の色の矛盾を拡大させて悩むとか、色の多元性を増すという、問題にもぶつかってほしいと思います。つまり、すらっと絵ができ上がりやすい方向の中で色を抑えてるのかなとふりかえってみることも大切ではないか。

淀　井：でも、色彩でも形でも、この人は慣れたところでまとめてますよね。私は、もっと単純というか、自分の描きたいとこだけを描いてほしいと思います。

何か絵を作る上で流れてたとこをみんな大事にすくいあげてるような、細部を大事にし過ぎるような…。もう少し考えてもいいかなと思います。

影日記ー澹々Ⅱ
162㎝×130㎝
八木　真恵　福岡県

安　永：それでは次はテレビ西日本特別賞「chat over tea」というタイトルの作品ですね。これは56歳の男性の作品です。

田　口：銀色のメタリックな素材を置いてその上に描く。それをある程度残すことを意識して描いている。情景が現代のイコンとして、若者がたむろするこういう場を捉えたのがおもしろい。難しくもあるし、またおもしろさも出る構図で、それがかなり成功してる。

矛盾をはらんだ色を投げ込みながらバランスをとるという絵。部分部分の質にどこまでもこだわるというのとはちょっと違う。あるところで打ち切って、全体のバランス、ハーモニーを考えるという。それは、若さの表現と見たんですが。年齢の見込みからはずれました。

安　永：私も若い人だと思っていました。表面に銀か何かのきらきら光る感じが、ちょっと特殊な感じで…。

田　口：色も好きな作品ですね。

中　山：構図の上での問題というのが、私はこういう群像の場合には引っかかるんですけれども、この場合には私の考えている構図法ということとはまた別な、もっと乾燥した個々の形の組み合わせで一つの雰囲気、和の雰囲気をつくろうというふうな方向だろうとは思います。そういう意味で、もっともっと年齢的には若い人だと思ったんですけれども、作品の中からウェットな状態のものがほとんど感じられなくて、乾燥した色彩感覚、あるいはマチエール、そういうものが目についてきます。

ただ、先ほどもちょっと話題に出したんですが、床の上にある碁盤状の遠近法と人物の大きさの持つ遠近法がかなり矛盾してこの場をつくってる。これは意識したのかどうかは、ちょっとわかりません。ですから、不思議な場の情景をそれが返って生み出してきているというふうには思います。

いろんなマチエールの上で色がもう一つ冴えて発揮されてないというか、何かこう、かさっとした感じを狙ったんでしょうが、そのかさかさの中にもう少し色が持つパルールというか、そういうものを活かした構成が使えると、もっと奥深いものになるんじゃないかというふうには思います。

佐　野：作者の生活と、この作品とが離れていないと思います。だから、こういうところで仕事をしているか、その場にいる人の絵ではないでしょうか。

安　永：日常的に見ている風景…。

佐　野：ええ。常に、いつも現場にいるというこの主題は。

デンキ虫
162㎝×162㎝
三浦　和代　大分県

それから、デッサン力があると思います。絵の作り方を勉強してる人ですね。だから、ここに何がなければならないとか、我々がかつて習ったような、そういう基本と構成を心得ている。それを現代風に見せようとして、いや見せようとしてじゃなくても乾いた明るい印象に、この作品ができたんだと思います。

それと、かなり何度も何度もこの主題を繰り返してやっていらっしゃいますね。これ見てると、随分手慣れた方ですね。

でもこの絵は、そういう部分が重なって来て好きですね。

淀　井：そうですね、何か映画の画面の動いてるような感じがあって、こういう映画見たような気がするんですけど。絵画にした場合は、そういうところを狙って、おもしろくダブらせたりしていると思いますが、ちょっと欲求不満になるんですね。

安　永：私は、よくアジアに出掛けていますから、見慣れた風景なんですね。特に東南アジアの喫茶店とか食堂とかはこんな感じなんですよね。実際に東南アジアなどで制作活動してる人たちもこういうテーマで描くことが多い。実際は、もう少しどぎつく描きますけれど、最初に見た時から何となくアジアっぽいなという感じがあって、非常に親しみを覚えていた作品の一つです。本当に、ある種のアジアっぽい猥雑さみたいなものを非常にうまく描き込んであって、私は印象に残った作品です。

次は、わだつみ賞の「儚い時を刻むもの」という作品です。田口先生と中山先生からはもう既に先ほどちょっと選評が出ましたけれども、もし何かつけ加えることがございましたらお願いします。

佐　野：私、一番気になったのは、これは遠くからですけど、手前の女性の腿なのか膝なのか良く分からない。見た瞬間に枕かなあと思ったんですよ、その部分。これがなければ、すらっとすんなり見られたんです。非常に洗練された勉強というんでしょうか、熱心によくやってらっしゃいます。あそこの一つだけ、どうしても気になります。

安　永：その辺が先ほど田口先生から御指摘のあった、部分部分を見れば、いろいろ破綻があるという、そのあたりなのかもしれませんね。

淀　井：私は、こういうテーマの絵に出てくるモチーフの選び方について、この方ということじゃなくても、剥製とか、小物、骨などの組み合わせが、もうちょっと何か新しく自分で見つけてくれたらいいのにと思います。

田　口：現代のイコンとして…。

淀　井：こういうレベルの方がもっと出品してくださるといいと思います。

田　口：ない物ねだりをすれば、色の問題。意識して色を排除することで絵を成功しやすくしている。だから画面の中にたまたま絵の具を、変な色を置いちゃったというようなことを手がかりに、色の面でもっと矛盾が生まれる中で、深まりをさぐる姿勢があってもいいんじゃないか。

佐　野：そうですね。私も大賛成です。

中　山：私も、同じ絵描き仲間だから、より厳しくなるのかもしれませんけれども、やっぱり田口先生がおっしゃったように、ない物ねだりがたくさんあって、どうして色彩をもっと使わないのかということ、それからアウトラインに頼ってしまって、そのアウトラインの中身を描こうとしないこと。それで終わりにしてしまうようなところも気になります。描いて描いて描き尽くして、アウトラインがなくたっていいだろうと。最後に残ったものがアウトラインであって、最初からアウトラインをつけてしまうということによって中身の描写が非常に希薄になっていきます。

それから、形を見ているようで、さっきの膝の反射光線の問題じゃありませんけれども、あそこの向こうの女性に至る足の長さもとても気になります。いろんな矛盾を含んだ形、それから色彩の物足りなさ。それから、これだけ描くんだったら質の問題にまで迫っていいと思います。皮膚の弾力や温度やそういったようなものまで感じるような、あるいは無機物の冷たい感じの質というものに目を向けていってもらいたいというふうには思います。

淀　井：期待が大きいですね。

中　山：大きいですよ。

佐　野：これから期待される年齢でもありますしね。

安　永：私は、もう少しどろっとしたようなものがあってもいいのかなと思います。

佐　野：色を使っていながら色がないという、色彩のモノトーンというか、色彩のモノクロームというか、その響きが、絵の中に見えるところよりも感じられましたね。

安　永：最後の一つは、損保ジャパン特別賞の「更新の因果」です。前

回も確か賞をとられている方だと思います。

田　口：線状の主な表現で、リズム感は決して悪くない、嫌いじゃないです。ただ、線と線の交わる角度が、みんな同じような角度で交わっていて単調です。。

例えば、飛行機が着陸するとき、滑走路にすべり込むように接近する。だが、直交するように近づけば墜落…。画家の引く線と線との接近、交錯にあっても、こうした多様性があっていい。

幼児が画面に線を引き回すとき、次第に繰り返しが多くなってくる。画家は、そういう段階からどう抜け出せるのか。籠とか織物の線状のからみ合いにも豊かな多様性がある。そのあたりのことを制作の場で、どう直感的にすくい上げることができるかどうか。

中　山：私は逆に言えば何かこう、法則に縛られないというか、そういう自由さが羨ましくてしようがないんです。

私は、物を描くときには、形、色、調子、いろんなものが絡み合ってきて、がんじがらめになってしまうんですけれども、そういうものから開放された状態で仕事をできる人は、非常に羨ましく思います。やはり、この線状の中のいろんな運動が持つものが、四隅に対しての影響をほとんど与えていない。全部四隅まで、四隅はもう全部省略したかなあと思うような画面にしか感じられない。ですから、画面としての力強さを求めるための方法を、色なり形なり線のリズムなりを使って、もっと強く深く考えてもらいたいと思います。

佐　野：私は、同じ仲間として仕事をしてるなかで、彼女が紆余曲折している時代に、「描け、もっと描け」、そして「描け」というふうに気合いを入れてきたんです。この方の特徴は線なんですよね。線で物語る。物語るというか表現していくということでは、さっき田口先生がおっしゃった角度の確率だとかも頭に入れて、描き方の研究をされた方が良いと思います。ほかに線で表現してるという人が余りいないので、線は捨てないで行った方がいいですし、この人の特徴です。だからこそ、皆さんの目にとまって、残ってきたんだと思います。

色彩も、色の面積、構図を、最初に考えて、どこを描かなければいいのかとか、どこを捨てるかとか、もっと研究して下さい。

やはり線というのは昔の武者絵だとか、写楽など、ああいう人たちの抽象的な表現にはかなわないですね。だから、この絵は抽象的に見えるけどもあくまでも具象ですね。

それから、光る描き方じゃなくて、光らないことをやってます。後から線を引きますから、光る画面は要求しません。

中　山：なるほど。色を使う人は絵の具の艶を嫌うとよく言いますけども。

佐　野：絵の具の場合は艶じゃなくて光が欲しいんです、。それが艶になる場合、邪魔になることがあります。

淀　井：あの方の場合は抽象というより非常に具象ですよね。奥行きのある風景のような、何か建物のような。ピエラ・ダ・シルバという画家がいますが、ああいう、すかっとしたものが入ってくるといいなと思います。描いていけば、どんどん重苦しくなってくるでしょ。もう少し洗練されると良いですね。

安　永：でも、線はきれいで、おもしろいですよね。

優秀賞の作品について

安　永：優秀賞についても、1点ずつコメントをお願いします。最初は、22歳の女性の作品で「望郷」です。

田　口：余り絵を作ってるという感じじゃなくでき上がってるところが珍しい、いいと思います。絵の具やストロークも多様で、ある粘っこいヌルッとした、みずみずしさがある。絵の具に、モノトーン状だけどいろいろな色があって、いい。大きいストロークと繊細な線とが随所にうまく組み分けられている。

しかし、そういうことを計算じゃなく、ひたむきにストレートに描いてる人なんでしょう。そういう若さの単純なエネルギーをもって、かなり押し切って成功した絵だと思います。

安　永：地平線の高さと頭の高さが揃っている所が気になります。

中　山：私は一番気になるのは、その地平線です。これだけ俯瞰して人物を見る場合に、地平線というのはもっと上に上がるか、あるいは画面からは消えてなくなるぐらいの状態でいいだろうというふうに思いますから。やはり基本的な物の組み合わせというか、デッサンの問題だと思います。

chat over tea
162㎝×162㎝
南波　久　東京都

安　永：私も最初からそれが気になっていました。

中　山：私も同様です。

佐　野：先生方がおっしゃった地平線ですが、あれはおっしゃるとおりで、描く位置でもっと絵が違ったと思いますが、ここに白いTシャツみたいに形があります。彼女のセンスで面白いです。この線がなかったら暗くて重くなりますよ。この人はやはりこれからも自由に描き続けて下さい。

田　口：足も画面からはみ出して、それがつたないのかもしれないけど、やはりそれは地平線の取り方と同じように問題はあるんだろうけど、そういう欠点があってもいいと思います。一生懸命なところを応援をしたい。

淀　井：素直な感じで、いいんじゃないかと思います。格好を余りつけてなくて、そういう素直さが面白いですね。

安　永：次は「Message 2011（祈）」です。60 歳の方の作品です。

田　口：ある程度の若さの方かと思ったら違いました。キャリアがないと、これだけのことはやれないということでしょう。

安　永：多分、そうだと思います。私もそんな感じがしていました。

田　口：エネルギーのある仕事です。

中　山：私も、年齢と作品のギャップが大き過ぎて、逆に言えば非常に若さが羨ましいです。

佐　野：やる気満々で何にでも挑戦していくということが、よくこれに表れてますね。

その意識がかえってない方がというか、これに出品して、こういうふうな絵を描いてということをなくしたら、この次描かれるときにもう少し絵を変化させていくのではないでしょうか。

田　口：それはどうでしょう。逆におとなしくなって、だめになるんじゃないでしょうか。

佐　野：そうですか。

淀　井：もう一つ、洗練させたいですね。

儚い時を刻むもの
162㎝×162㎝
小木曽　誠　佐賀県

佐　野：上を向いて歩こうの方がいいですか。

田　口：僕は、これがもっと洗練されて完成されたら多分平凡になると思います。

佐　野：なるほど。

田　口：そう見たくなるような、おもしろい作品だと思います。

佐　野：本当に、見てすぐおもしろいなと思いました。

色が同じ黄土色系ですか、そういう強さみたいなのを感じます。

田　口：年齢からいっても、この人の代表作になるんじゃないですか。

安　永：そうですね。ある種の完成度がありますよね。

中　山：正方形の画面の扱いを非常に心得ているなと思いました。

安　永：次は「増殖」です。田口先生、先ほど影の扱い方についておっしゃっていましたね。

田　口：影の扱い方が新鮮というか、絵画における空間の次元の問題に対決していて、とてもいいと思います。

色からいうと、モノトーンの系統だから不満はありますが、筆触が動いてる部分もあるし、何かうまい言葉がないけれど、画面に多元性があっていい。

中　山：私は、これだけ何か見事に約束を排除して、だだっ子のように絵を描いてみたいと思います。

安　永：影というか、そういうものが意識の中にあると思います。

佐　野：私は、わけのわからないようなおかしさがある不思議なところが面白いです。それで画面全体には、和室？

安　永：和室でしょうね。

佐　野：下が畳みたいに見えるので、小さく孤立した空間で、いろんなところに無作為に物を置いていったと思うんだけど、実はよく計算がされている。

一つ気になるのは、上の方にピンクと白、あれをもうちょっと考えていればもっと雰囲気にすごみが出ると思います。

安　永：確かにそうですね。

更新の因果
162㎝×162㎝
桜岡　みゆき　東京都

佐　野：そうすると、この人の本領がよく出てきますね。

田　口：狙いとしては、そういう違和感のあるタッチをはっきりと置きたかったということでしょう。

安　永：影ではない部分、子供みたいな人物が襖か何かに絵を描いているところ、そこがもう少し…。よく見ないと何が描いてあるのか見えないというのが、ちょっと…。

中　山：頭の描きようかなと思います。何となく白髪に見えてきて。

佐　野：わざと白で、すうっとかけたんですかね。

淀　井：物語性があるんですね。

安　永：なるほどですね。

次は、「進む日」という優秀賞の作品です。

田　口：前景、中景、遠景と分けて考えると、手前、前景の部分はコンクリート片などのプラスチック、立体的な表現で、これは破壊の状況なのでしょう。中景に移ると実体の表現というよりは、淡い影のところに表現の狙いを移している。画面全体が一様な表現でないのがいい。モノトーンの風景にものたりなさはありますが、若い人の深い感性があるとみました。

中　山：題名から見てもそうだろうと思いますが、今度の大震災のイメージがこの作品から感じられます。

安　永：瓦礫でしょうか。

中　山：瓦礫でしょうね。日常というものから、いきなりこういう状態になっう状態になった場合の一種の心象を写実的に表現してある。

遠くから見るとかなり緊密に描いてあるようなんですけども、近くで見ると、そんなに描いてないですね。これは、一つのテクニックとしては、立派なものだと思います。細密に描いて緊密に見せるという方法が今非常に多い中で、この方法というのは、ちょっと極端ですけども、ベラスケスの近づいて見たらあまり描いてないけども離れて見ると写実そのものだといったような表現に共通するテクニックがあるように思いました。なかなか力量を持った人だろうと推測します。

佐　野：そばに寄って見ますと、色彩の変化はたくさん使ってありますが、遠くだとそういうものがないという、まとまりというかな…。

安　永：アクリルを使っていると書いてありますね。

佐　野：いろんな材質のものでね、もっと空気をうんと吸いたいと思うんですけど…。紙飛行機が飛んでますよね。

安　永：紙飛行機が先生はお気に召さないんじゃないですか。そういうことはないですか。

佐　野：はい。それが絵の若々しさだなと思いました。

中　山：希望のシンボルみたいですね。

佐　野：テクニックは十分出来ているので、そういうことでは確かに好ましいです。

安　永：そうですね。隅々まで力を抜かずに、若い精神的な緊張感みたいなものを感じますよね。

中　山：そうですね。

佐　野：その緊張感が逆に、そこで深呼吸をしたくなるという、そういう強さですね。

安　永：優秀賞の最後の１点です。57 歳の方の作品で、「ねえ鳥になりたいね　森の深くで眠りたい－XX」という、非常に文学的なタイトルの作品です。

田　口：こういう異質なものに意欲的に取り込んで、いやらしいぐらいに、これでもかというとこまでやり切っているところは、すごいと思います。この人の仕事の中で、これがどういう意味を持つかは後のことですが、やるだけのことをやった仕事。感心します。

中　山：私は、立体的、写実的な表現と、それから全く平面の異質な部分との組み合わせがおもしろいと思います。とても私どもの世代から遠いし、画面から受けるものは何か想定外というか…。

佐　野：私は今この題を見て、題のつけ方が余りにも第三者に納得させるような題ではないのかと思います。

望郷
162㎝×112㎝
安中　仁美　茨城県

進む日
162㎝×162㎝
小川　道久　大阪府

安　永：説明的過ぎますか。

佐　野：ボルトでオブジェを締めたり、随分様々な技法を使っていて、そういう様々な研究の効果は出ています。その顔のところが、わざとですか、リアルみたいな具象なんですが…。
他の先生方は、どういうふうにお考えですか。

淀　井：首の部分が、不自然過ぎると思います。

安　永：ちょっと気になりますよね。

中　山：それが彼の狙いじゃないですか。

佐　野：返って、そこに目が行きますよね。そういうふうに見せている…。

中　山：それが見せ場なのかもしれないですね。

佐　野：そこは不思議だなと思うでしょ。だから一点集中で、目が行きます。それがいいのか悪いのかわからないということです。

淀　井：羽とかは、おもしろく描いてあるんだけど、そこをどうにかしたいということですね。

奨励賞の作品について

安　永：それでは次に、奨励賞の「DRAWING PHOTOGRAPHY 1103」「Figure nude I」「リフレインIX」「死滅回遊」「刻刻と移る」の5点について、特に取りあげたい作品があれば、一言ずつお願いします。田口先生、いかがでしょうか。

田　口：「DRAWING PHOTOGRAPHY 1103」についてですが、これは描いてるというよりは、現代の写真など、変換の技法を徹底して使っているんでしょうけれども、絵の具で存分に苦労して描いたような感じがあって、こちらがわからないような現代の様々なプリントの技法を使って、その結果として、写真的なおとなしい、写しの表現じゃないところが出てるという意味では、やはり無視できない作品です。

安　永：「写真とドローイングの相剋」と作者のコメントがあります。

田　口：そういう自由なドローイングがどう入っているのかはわからないけれど、写真技法の変換のテクニックかなと思って見ますけど、力量ありますね。

安　永：そうですね。デジタル画像が流れるときの感じを非常にうまく提示している。そういう意味では現代的というか、今日的な作品だと思います。私は結構好きですね。佐野先生、いかがでしょうか。

佐　野：5点の中でいいますと、やはり、線で描いているあの一番若い20歳の方の作品が気になります。
今は、いわゆるパソコン、CGを使う時代で、そちらに目を向ける人が圧倒的です。逆に、この方の粘り強さと情熱を大いに推薦しますね。

Message 2011（祈）
162cm×162cm
窪田　正博　福岡県

ねえ梟になりたいね　森の深くで眠りたいーXX
162cm×162cm
佐藤　光郎　宮城県

増殖
162cm×162cm
横田　招　広島県

中　山：この人も女の人なんですね。

佐　野：これだけ克明に描いていく、そういうファイトみたいな執拗さ、一途さが好ましいです。

田　口：そうですね。線を引き続ける行為に集中力があって、やりきってるという点が、やはり若い人に恵まれた集中力なんでしょう。

佐　野：そういう20歳に大いに期待してます。
もちろんCGのやり方を否定してはいません。けれども、手で描く、そういう黄金の腕をつくるということを、もっとたくさんの若い世代にやってもらいたいと思いました。

中　山：そういう意味では、手法は違いますけれども、レンブラントのエッチングみたいな執着を感じますね。

佐　野：ただ描いてるんじゃなく、絵としてもでき上がってるから、先生方

がぱっと見たときに思わず前へ寄ってごらんになっていらしたんじゃないでしょうか。

淀　井：平凡かもしれないけど、「刻刻と移る」の色彩が心地よいかなと思いました。

田　口：こういう色の作品が少ないですね。

淀　井：今は少ないです。

佐　野：色彩がとても美しく魅力的ですね。ほっとします。

中　山：ああいうピンぼけ、焦点が合わないレンズみたいなものの中でいろんな遊びができるという一つの方法なのかと思いますけど。

美術界の発展に向けて

安　永：長時間にわたっていろいろお話しいただきましたけれども、最後に美術界全体への感想とか発展に向けて望むこととかがございましたらお願いします。

佐　野：私はずっと東日本から出たことがないので馴染みが薄いのですが、こちら西日本というか西の人たちの中から作家、巨匠がたくさん出てらっしゃるんですよね。それに続く巨匠は必ずこういうところから出てくると信じたいです。

安　永：明治・大正のころは確かに九州から多くの大家が出ましたけれど、最近はそうでもないですよね。昔に比べれば、ちょっと元気がないのかなという感じはあります。

Figure nude Ⅰ
117㎝×45㎝
橋本　千恵子　兵庫県

刻刻と移る
130㎝×162㎝
植木 敬子　茨城県

佐　野：私の年代あたりだと、小説や詩などの文学の方だとそんなに怖じ気づかないですけども、絵になると急に西に比べて東は…、という気がいたします。

今の同世代の方は、いわゆるパソコンやメールで、同じような考え方になっているんでしょうか。

安　永：どうでしょうね。多分、一緒じゃないでしょうか。

中　山：相手の顔が見えなくても、同世代意識というのが非常に強いと思います。

佐　野：だから、いいか悪いか別にして、美術界も含めどこの世界にしても、今は変わり時じゃないでしょうか。

安　永：私はアジアの方に関わっているものですから、今の日本の若い人を見ているなかで、やはり何か切実さがないというか、欲望がないというか、満足しきってるというか…。何でも揃っていますから、次に何を望むか、何が欲しいかが見あたらず、欲求が希薄だから、そこでちょっと停滞している部分もあると思うんですよね。その辺を打破してもらいたいと思います。

大部分のアジアの状況は、非常に貧しいとか、物がないとか、不平等だとか、努力しても自分の力が認められないとか、そういう苦しい状況の中からはい上がろうという気持ちがみなぎっている。日本の戦後の時代によく似た状況があり、そこからパワフルな新しい力が生まれてきています。

田　口：今度の大震災というのは、私はもう一つの敗戦だと思います。私は敗戦のとき 15 歳で、ゼロから急に絵描きになろうと突然発想したわけだけど、あの時代何もなかったでしょ、マイナスしか。だから、別に震災あってよかったなんて言わないけど、若い人を含めて意識がすごく鋭く、ごつくなるかもしれないなと私は思います。

佐　野：私も田口先生と同じ意見で、今を機に、必ずいい方向へというか、どんなことでも我慢できるというふうに思いました。

田　口：近年の若い人の「べつに」というような意識が、今度の震災でなくなっていくんじゃないでしょうか。今、アジアが元気というけど、日本もそれに遅れないで、野蛮なぐらい元気になってほしいと思います。

中　山：災い転じて福ですね。

佐　野：そうです。どこでも我慢できると思って、ああでもない、こうでもないって言ってることが何でもなくなりましたね。

安　永：それでは、これで座談会を終了させていただきます。先生方、どうもありがとうございました。

死滅回遊
146㎝×103㎝
村井　香穂　大分県

リフレインⅨ
162㎝×162㎝
山口　博司　長崎県

DRAWING−PHOTOGRAPHY 1103
130㎝×162㎝
山崎　直秀　和歌山県